

# Real Humanitarian Action REACT

2009年 10月号



©Brendan Banon

## 逃げ惑う30万人。

—安全な生活を求め、スーダン南部国境地域に逃れる人びと—

# VOICE

派遣スタッフの声 ~現地活動に参加して~

## インド、マニプール州の 知られざる民族抗争の傷

精神科医

松山 雅

Miyabi Matsuyama



プロフィール:大阪府出身。大阪市立総合医療センター勤務などを経て、2006年よりMSFの活動に参加し、'07年3月から'08年4月には、バングラデシュでロヒンギヤ難民の心理ケアに携わった。

### 今

今年1月から7月までインド北東端のマニプール州で、心理ケアの指導を行ってきました。ここは、第二次世界大戦中に日本軍が「インパール作戦」で多数の死者を出した激戦地です。現地の人々はこれを「日本戦争」と呼び、イギリスからの独立を助ける大義の下の侵攻だったことや、暴虐行為がなかったため、日本に対してとても好意的です。日本軍が残っていたものもいまま大切に置いている家も多く、若い人も65年も前の出来事をよく知っています。日本兵が赤痢に苦しんでいたからか、赤痢を「日本下痢」と呼ぶなど、意外なところにも日本が登場します。



マニプールのMSFの診療所で診察を待つ母子たち。(2006年撮影)

マニプール州は複雑な民族構成で、独特のヒンドウ教を信仰する1つの民族が盆地を占有し、周辺の丘陵地帯に33もの少数民族が混住しています。戦後もインドからの独立闘争や民族間抗争など情勢が不安定で、外国人への厳しい入域制限があり、長期

滞在の外国人はMSFスタッフのみでした。1997年に人口10万人の町チユラチャンドプールで起きた民族間抗争は、町の住民を二分し、銃撃戦で血で血を洗う戦いとなりました。1年半あまりで停戦となりましたが、各民族が自衛や抗争のための地下組織を持ち、現在に至るまで民族間の暴力が絶えません。その町でMSFは4つの診療所を運営し、基礎医療やHIV/エイズ治療、心理ケアを提供しています。HIVは民族間抗争とは見、無関係に見えますが、感染拡大のきっかけは抗争中に若い兵士たちが心の痛みや不安を忘れるために使ったロイン注射です。戦争は、長期にわたり心身に深い損傷を及ぼしています。

外来にはさまざまな不安症状をもつ患者さんが来ますが、自らの症状を抗争と関連付けられる人はほとんどいません。それは逆に、すべての人がその状況に苦しみ、患者さんが特別ではないことを示しています。不安の源を認知し、経験を意味付けできないと、症状はなかなかよくなるのですが、町で生活していくために抗争について触れることがタブーになっていることや、恐怖の記憶を否認する心理が働くことで、それが難しくなっています。

心とストレスは、水風船と水のようなものです。ストレスは、ある程度までは溜まっても大丈夫ですが、あまりに沢山になると心が破れてしまう。チユラチャンドプールの町には、水風船が一杯まで膨らんだ状態の人がたくさんいました。終わりの見えない緊張状態にある町で、MSFのカウンセリングが、少しでも心の負担を軽くし、心の弾力性を取り戻す助けになればと思います。

## MSFインフォメーション

### ●海外派遣を目指す非医療従事者のためのInformation Day(参加無料)

【日時】10月17日(土)10:30~16:00(終日、午前または午後のみ参加可) 【会場】国境なき医師団日本事務局  
【対象者】①アドミニストレーター(財務・人事管理責任者)またはロジスティシャン(物資調達管理調整員)として、海外派遣スタッフの応募資格を満たしている方(www.msf.or.jp/work/「必要な資格」へ)  
②2年以内の派遣が可能な方  
詳細については、ウェブサイト(www.msf.or.jp/event/)へ  
【問い合わせ・申し込み先】Tel: 03-5286-6161 または E-mail: recruit@tokyo.msf.org リクルート担当まで  
※ただし、定員40名に達しだい、締切らせていただきます。

### ●海外派遣スタッフ募集説明会(参加無料)

【日時】11月13日(金)18:30~20:30 【会場】国境なき医師団日本事務局  
【問い合わせ・申し込み先】Tel: 03-5286-6161 www.msf.or.jp/work/「海外派遣スタッフ募集説明会」へ

### ●国際協力キャリアフェア2009に出展します

MSFも海外派遣についてご案内するブースを設置しますので、関心をお持ちの方はぜひお越しください。  
【日時】11月14日(土)9:30~17:00  
【会場】こまばエミナス(東京都目黒区大橋2-19-5)  
【主催】国際協力キャリアフェア実行委員会  
【問い合わせ先】(株)国際開発ジャーナル社(Tel: 03-3584-2191)

### ●遺産・お香典からの寄付に関するパンフレット

国境なき医師団は、遺産や相続された財産を次の命へとつなぐ架け橋になります。寄付していただいた遺産は非課税扱いになります。パンフレットは、下記の電話番号かウェブサイトからお申し込みになります。フリーダイヤル:0120-999-199(9:00~19:00 無休) www.msf.or.jp/donate/「寄付をする」>遺産・お香典からの寄付へ



## 活動ニュースフラッシュ

### パキスタン:避難地域で下痢の重症患者が急増

今年4月に激化した北西辺境州の武力衝突。その後、避難した人びとは徐々に故郷へと帰還していますが、マルダン郡など避難民の多くを受け入れた地域ではいまも切迫した医療不足が続いています。人口過密による衛生環境の悪化に8月からの洪水被害が拍車をかけ、下痢による重症患者が急増。地域の風土病であるコレラまん延の可能性についても調査が開始されました。MSFは現地医療機関への援助の強化とともに専門治療センター設置などの対応にあたっています。<8月27日現在>

### スーダン:民族グループ間抗争の被害に緊急対応

スーダン南部では、中面記事でお伝えした「神の抵抗軍」の攻撃に加え、現地の民族グループ間の武力衝突が激化。この抗争による死者はこの半年で1000人を超え、約14万人が避難を余儀なくされています。8月29日にも新たに大規模な襲撃が起き、女性や子どもを含む42人が死亡、17の村々からさらに約2万4000人が避難しました。現地で避難民や負傷者のための人道・医療援助を展開していたMSFのチームは、今回の襲撃の被害地域に急行し、緊急対応を開始しました。<9月3日現在>



特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 [www.msf.or.jp](http://www.msf.or.jp)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階 Tel:03-5286-6123(代表) Fax:03-5286-6124  
【寄付に関するお問い合わせ】 ☎0120-999-199(9:00~19:00 無休) Fax:03-3764-7682

国境なき医師団(MSF)は、1971年にフランスで設立された、非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人びとの緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする4600人以上の海外派遣スタッフが、2万4千人の現地スタッフとともに、世界65ヵ国で援助活動を行っています。(2008年度)



# カルテの 向こう ―命をめぐる物語―

ブルンジ唯一の性暴力被害者ケアの専門施設に勤務するニヨンセンガ医師。



## 性暴力に「ノー！」

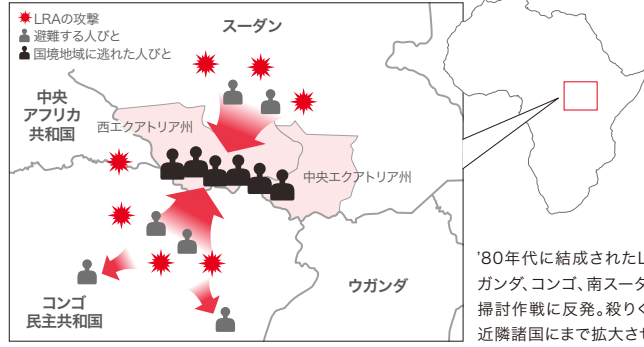
東アフリカに位置する国ブルンジ。国境なき医師団(MSF)が6年前に設立し、今年6月、現地の団体に引き継がれたセルカ医療センターは、この国唯一の性暴力被害者ケアの専門施設です。

元MSFスタッフで現地団体を立ち上げた一人、ヴァスティン・トヨタ・ニヨンセンガ医師は、性暴力被害を減らすための広報活動に努めています。「ブルンジの言葉、キルンジ語で「ノー！」を意味する「OYA(オヤ)」!。それが性暴力に「ノー！」と声を上げる私たちの運動名になっています。現在数千人が参加しているOYA!では、各地のコミュニティと連携し、歌や芝居なども交えながら広範囲の人びとへ性暴力に関する知識を伝えています」。

ブルンジではベルギーからの独立以降続いた内戦が2005年に終結して復興が進んでいますが、性暴力は紛争下でまん延して以来、いまま残る闇の部分。レイプ被害を恥とみなす風潮があるため、被害者が訴え出にくく、適切な治療を受けることを難しくしています。

そのような状況の中、セルカ医療センターは、毎月新たに約130人のレイプ被害者を受け入れ、妊娠やHIVなど性感染症の予防、外傷の手当、心理ケアなどを提供しています。

現在治療中の25歳の女性は、近所の男にレイプされて来所した当初、自分がひどく汚されたように感じて泣き通していましたが、治療を受けることで徐々に落ち着きを取り戻すようになってきました。ニヨンセンガ医師は、助けを求められる場所があることを彼女が知っていて本当によかったと語ります。「彼女にとって救いだったのは、以前からラジオで当センターのCMをよく耳にしていたこと。ここは新たな旅が始まる場所です。彼女たちが暗闇から一歩踏み出して、生き続けることを支えたいと思います」。



’80年代に結成されたLRAは、ウガンダ、コンゴ、南スーダン共同の掃討作戦に反発。殺りくの範囲を近隣諸国にまで拡大させている。

## MSFの活動

多くのコンゴ人難民が逃げ込んできたスーダン南部の西エクアトリア州、中央エクアトリア州。MSFは両州で、医療・救援物資の提供、水・衛生設備の設置、現地医療関係者の指導、感染症流行のリスク監視、はしかの集団予防接種、心理ケアなどの緊急援助活動を展開。しかし、LRAの攻撃が難民キャンプ周辺に及ぶこともあり、難民たちとともに安全を求めて移動しながらの活動を余儀なくされている。



難民キャンプ内にMSFが設置した診療所では、妊娠・分娩ケア、栄養治療なども提供している。

## 医療、栄養、衛生、生活物資、 心理ケア……求められる援助

コンゴ人難民、さらには国境付近に住むスーダンの人びとも安全を求めて移動を始めるという事態を受け、国境なき医師団(MSF)は直ちに、彼らに医療、住居、衛生設備を提供するための緊急対応プログラムを立ち上げました。昨年9月に西エクアトリア州で計1万5000人以上の難民と避難民を対象に援助を開始。今年2月からは中央エクアトリア州で7000人の難民のために第2次緊急対応プログラムを行いました。スーダン南部におけるMSFの活動責任者、カール・ナウジは次のように説明します。「難民たちは常に危機に直面しています。MSFが診療所を開設した際は、1週間でも500人が訪れました。出産間近の女性がジヤングルを抜けて知らない国へ逃げ、そこで出産しなければならぬ状況を想像してください。私たちは、子どもを安全に産める場所を提供し、人として尊厳のある生活を確



息子を殺され、その妻と1歳の孫とともに避難してきた男性。難民たちは絶望感と不自由な生活に打ちひしがれている。

## 人としての尊厳の 支えになりたい

人びとの前にあるのはどうか生き延びるだけの生活です。ベッドも椅子も窓もない小屋で、持ち物は食器が数個ずつだけ。狭く暗い場所にも、6人が肩を寄せ合っています。彼らを支えるため、MSFは活動を続けています。活動責任者、ナウジの言葉です。「彼らは援助を通じて誰かが側にいて気にかけてくれることを救いに感じています。そのことによって、自分たちがまだ人間であること、忘れないでいられるからです」

当地域の現状とMSFの活動は、以下のウェブサイトでもご覧いただけます。  
www.msf.or.jp/news/ 「特集 コンゴ北東部・スーダン南部：苛烈な暴力から逃げ惑う人びと」へ



©Brendan Bannan

# 逃げ惑う30万人。

―安全な生活を求め、スーダン南部国境地域に逃れる人びと―

右手前の女性は、一度「神の抵抗軍」に捕まったが何とか逃げ出し、家族と避難してきた。(ニヨリ難民キャンプで)

ウガンダの反政府勢力「神の抵抗軍(LRA)」が、一般市民を標的とした攻撃を激化させています。コンゴ北部の村々を襲う破壊と殺りく、そして女性と子どもは性的な奴隷や略奪品の運搬役、少年は兵士に……。国境なき医師団がこれまでもお伝えしてきた惨劇の事実を、改めて現地からの声とともにご報告します。

## 16歳の少年を 突然襲った死への恐怖

16歳の少年ムボリが住んでいたコンゴ民主共和国(以下「コンゴ」)のある村は、1月に「神の抵抗軍」に襲われました。ムボリと兄弟のムカが通う学校も襲撃を受け、兄弟は他の20人の生徒とともに連れ去られました。兵士らは少年たちを殴り、略奪した食糧や機械を運んで歩くように命じました。「朝は25回ムカで打たれました。それが朝食代わりでした……」

ムボリは、目の前で多くの人が殺されるのを見たといいます。「通りがかった人たちが棒で殴り、銃剣で突いて、死体を川に投げ込んでいました。もし立ち止まったら自分も殺されてしまうかもしれないという恐怖で、担いだ荷物が重くても必死で歩きました」

拉致から3日後、なぜかムボリと数名の少年は解放されましたが、村に戻ってみると、すべてが破壊され、誰もいません。幸いにも両親は息子たちを探して近くの森に隠れていました。ムカが捕えられたままと聞いて、父親は泣きだしました。しかし、ムカを助け出すことも、待ちつづけるわけにもいかない家は、避難を決意し、歩いてスーダン南部の難民キャンプにたどり着きました。

## 国境を越えてなお、 底知れぬ不安に駆られる日々

ムボリ一家のように「神の抵抗軍」に追われて避難するコンゴ人は30万人にも及ぶと見られ、うち数万人は少しでも安全な場所



ムボリ少年は死への恐怖と直面し、生きる希望を失い、不安な難民生活を送っている。

を求めて国境を越えてスーダンに逃げ込んでいます。スーダン南部に着いたコンゴ人難民たちは、身を守るために大きな集団でいられるよう、難民キャンプに助けを求めるか、スーダン人集落に身を寄せます。しかし、「神の抵抗軍」の攻撃は、コンゴ国内を避難しています。人びとは襲撃を恐れて自ら武器を持ち、仲間たちと地域の安全を守ろうとするほど、現地の状況は緊迫しています。それでもコンゴから来た難民たちは、この方がはるかに安全だと感じているようです。ムボリたちが難民キャンプに到着して4カ月後、ムカが「神の抵抗軍」から逃げ出してコンゴの病院にいるという知らせが届きました。父親はムカを探しに戻ろうとしましたが、道中がまだ危険すぎて果たせずにいます。ムボリは兄弟のことで胸を痛め、底知れない不安を抱いたまま難民キャンプで暮らしています。「将来についてなんて、考えようがありません。どんな将来があるのでしょうか?」

<表紙写真>「神の抵抗軍」に村を襲撃されて避難し、スーダン南部ニヨリの難民キャンプにたどり着いたコンゴ人難民たち。